

編集部後記

歴史の重みの喜び

柏木 貞夫
 佐藤 秀雄
 北川 俊治
 横山 博行
 安田 忠典
 伴 義孝

1998年5月10日午前10時に、柏木貞夫、伴義孝、佐藤秀雄、北川俊治、横山博行、安田忠典の6名が吹田市の北千里体育館に集まった。「50年史」のほぼ最終的な編集部会のためである。この席上で、2つのことが決まった。

- ① 編集後記は6名がそれぞれ内容に規制を設けずに自由に書く。
- ② 編集部会の上部「編集委員会」の議を経て、「50年史」に「頒価」をつけて、希望者に実費で頒布する。その理由には、当初計画を大幅に上回る「頁仕立て」になったので、資金調達の意味も含まれている。

さらに発刊の見通しを7月上旬に定めることとなり、それまでのすべての段取りを、編集部で行うことになった。これまでの編集部会は、編集委員会も含めて、その設置以来、足掛け3年の間に28回を数えている。その間、必ずしも6名全員が集まったわけではない。6名はそれぞれ仕事もっているボランティア編集員である。会合は早朝であったり、深夜に及んだりした。あるいはレ

スリング大会の場を借りての臨時会合となったこともある。ここに編集委員会スタッフを紹介して、その間のご奉仕に感謝しておきたい。なおその間、現役部員の諸君が原稿整理や資料収集に全力をあげて協力してくれたことにも感謝しておきたい。

〔編集委員会〕

委員長 清谷利次
 副委員長 柏木貞夫
 委員 横山勝利
 委員 西脇義隆
 委員 松浪啓一
 委員 神谷和巳
 編集部長 伴 義孝
 部 員 柏木貞夫
 部 員 佐藤秀雄
 部 員 北川俊治
 部 員 横山博行
 部 員 安田忠典
 委嘱部員 岡部忠夫

編集委員会を編成したのは1996年6月のこと

だった。それから、上記の編集部会までに、既に28回を数える委員会・部会を開催してきた。上梓までには、少なくともあと数回の会議が必要となるので、30回を上回ることになる。その間、校正にあたっては、縁あって専門職の方をお願いした委嘱部員の岡部さんのボランティアとしてのご協力にも大いにお世話になっている。感謝しておきたい。本書を閉じるにあたって、ここに、編集部後記として6名にそれぞれの「後記」を書いてもらうことになった。



写真▷編集部会・平成10年5月10日
左から：横山・北川・伴・柏木・佐藤・安田

1. 天下一品の出来栄え：柏木貞夫

「創部50周年記念事業は盛大にやろう！」と、1996年度の役員会、総会を経て、決めてきた。そのメイン事業は、「創部50周年記念式典」（1997年11月24日開催）と「レスリング部50年史」の発刊ということになった。特に「50年史」の発刊は、早速に編集委員会と編集部会を決めて作業に取り掛かることになる。正規の第1回編集委員会の開

催は1997年3月31日のことである。「正規の」と書いたのは、それまでも準備委員会（編集部会）を数次にわたって開催して既に資料等の掘り起こしを行っていたからではある。

その後、編集部会による会議と打合せが精力的に開催された。実にその回数は、本節のリードにも記述されているとおり、1998年5月10日の時点までで、延べ28回を数えている。しかし、編集部会のメンバーも皆さんが自分の仕事に努めながらのボランティア作業である。それに追い打ちを掛けるかのような「不況」である。戦後50年は好景気と不況の繰り返しであったが、今回の不況は戦後最大のデフレ不況である。5月18日に、編集部会メンバーは印刷業者との最終打合せを行ったのであったが、その帰路の席上でもこの「不況」の話に言及して、あるエピソードが披露された。

「原稿執筆をしたいのは山々だ。しかし仕事に追われて、書く時間がない。判ってくれ。それに50周年記念募金に応じる資力にも行き詰まっている。寄付もしないで書くというのも申し訳ない。この不況は商売人にとって過酷だ。だから今回は心の応援だけにさせてほしい。スマンと思うが……」

実に原稿依頼に際して、こんな切実な応答も数々あった。こうした色々の側面から編集作業は難行をきわめた。だが皆が頑張ってくれた。そしてようやく完成することになった。内容は「天下一品」であると自負しても許される重厚な出来栄えになっている。まさに関西大学レスリング部の半世紀の内容実態と同じく、この「50年史」もまた、苦勞し、難産して、ようやく上梓に漕ぎ着けることとなった。それだけに喜びは大きい。

50年史の編集作業に直接従事して下さった委員の方々をはじめ、それぞれのご寄稿、写真や資料の提供をして下さった方々に、また、50周年記念事業資金の募金にご協力賜りました方々に、衷心より感謝し、厚く御礼を申し上げ、私の編集部後記とさせていただきます。（昭和33年卒）

2. 歴史の重み：佐藤秀雄

輝かしい歴史と伝統の関西大学レスリング部50周年記念史の編集委員の一員になりましたが、与えられた任務が無事に全うできるかどうか、正直に言って不安一杯で、身が細る思いでした。ちょうど学生時代のリーグ戦に臨む強化合宿に1年間も身を寄せていた思いがします。だが、こんなにも、充実した日々を過ごしたことは学生時代の、それもレスリングに明け暮れた日々のその時以来の、久方ぶりのことでした。責任は感じたものの実に楽しかった日々でした。

最初は何も判らずに、「30周年記念誌」が存在しているものの、どうして手掛けたいのか、皆目検討すらつかず、苦労の連続でした。しかし、何回かの会議を重ねるうちに、原稿の収集、その割りつけ、そして校正などと、これもまったく同じく学生時代の練習成果の蓄積過程のように、段々とそれらしくなっていくことが実感できました。伴先生のリーダーシップのもとに、ブレンストーミング方式で討論と検討を重ねてきましたが、徐々に具体化されて、その骨格が見えてきて形らしきものが創造されていったときには、何とも言えない充実感に覚えました。

発刊は当初予定より若干ずれ込んでしまいましたが、関係各位のご尽力によって、漸くここに、上梓する目処が立つことになりました。先日平成10年5月18日に、神戸の「印刷屋」さんへ基本的な打合せのために、編集部員全員で伺いました。その帰りに、元町の南京街で中華料理を食べながら、自前でささやかな「脱稿祝い」をいたしました。が、実に楽しい一時でした。

私は、微力で、何の力も発揮することはできませんでしたが、編集委員の一員として、歴史の重みに、誇りを感じている次第です。「正史」は自分の胸にしまっておくべきでないことを、この編集作業に携わりながら、思い知ったのです。まず我が子に知ってほしい。半世紀のなかには、た

とえちっぽけでも「私自身の自分史」が刻まれています。これを知ってほしい、と正直に思いました。そして関大レスリングの半世紀は、まさに世界の誰にも誇れる、一コマ一コマの積み重ねであることも実感しました。本当に楽しい仕事でした。

最後に、今回の「50年史」の編集に携わらせていただきましたことを感謝申し上げますとともに、各位のご支援、ご協力に対しまして、衷心よりお礼を申し上げ、私の編集後記とさせていただきます。（昭和42年卒）

3. 写真集めに苦労：北川俊治

これで、「30周年記念誌」に引き続き、2度目の、お手伝いをさせていただきました。

30周年のときは、若干31歳で、元気モリモリ。そのときの思い出は；

- ① ご褒美に先輩方に新阪急ホテルのバイキングに連れて行って貰いました。今度は、何処に、連れていってくれるかなア？
- ② 中之島図書館に行って『毎日新聞』の記録を調べました。

今回の「50年史」では、ボチボチの元気。51歳です。今回思ったことは；

- ① 高堂俊彌先生ご苦労さまでした。先生は長年我が部の部長を務められ、この「50周年」時にご定年とられました。
- ② みなさまの写真集めが、こんなに苦労とは、夢にも考えていませんでした。

さて「70周年」は71歳となるのだが、どうかしら。期待していることは；

- ① できることなら元気印で記念パーティーに出席したい。
- ② 介護保険のお世話になっているかもしれません。または援助介護（援助交際ではありませんぞ。）でハリキッているかも。
- ③ 天国？できましたら、そちらに行きたいのですが、先に逝かれた諸先輩方、待って

いてください。

そして「100周年」、101歳で、これは、これは……。でも期待することは；

- ① 是非とも出席したい。だが無理だろう。
- ② 「記念誌」だけは、是非とも、墓まででも届けてほしい。

では、みなさん、「70周年式典」「100周年式典」でお会いしましょう。（昭和45年卒）

4. 自画自賛の「50年史」：横山博行

編集作業に携わった者の一人として、ワクワクしながら、自画自賛しています。

「いやあ、実に立派な記念誌ができあがった」

何度と繰り返した校正作業中も、つい引き込まれて、読むことに没頭してしまうことがしばしばありました。それほど素晴らしい内容です。

大いに困ったことは、「記録」と「写真」でした。不思議なことに、いやむしろ当然なのかもしれないですが、「物の無かった時代」の先輩方（失礼！）のほうが、きちんと整理されていて、あれもこれもと所持されていました。「物の豊かな時代」に生まれ育った世代のみなさん、反省いたしましょう。私もその一人ですので、おおいに反省しています。

半世紀の足跡を、編集作業中に、垣間見て、色々な発見がありました。上記の「記録・写真」類の保管状況の比較文化論もその一つでした。実に、為になる、勉強をさせて貰いました。今回の編集部員では、私と安田さんの2名がはじめて関わることになりました。その他の先輩方は、「30周年記念誌」に引き続いて、2度目のご奉仕です。その尺度でならば、私どもは、「70年史」を担当することになるのでしょうか。その頃は、世の中も、変わっているでしょう。さて「記録」や「写真」などはいったいどうなるのでしょうか。「インターネット」の時代、新たな文化現象が見られるかもしれません。

現役部員、そして未来のレスリング部員のみなさんへ、お願いします。みなさんの日々の活動は、関西大学レスリング部の歴史そのものです。新たな歴史を、輝かしい歴史を創造してください。4カ年という限られた時間のなかで、精一杯の努力をして、素晴らしい「時」を刻んでください。

最後に一言。「お疲れさまでした！」をみなさんに……。 （昭和56年卒）

5. 流した汗は本物：安田忠典

当たり前のことですが、世の中には、お金で買えないコトがあります。私たち日本人は、戦後の復興から現在に至るまで、いろいろな「お金で買えないコト」を切り捨てて、お金で価値の計れるモノばかりを求めてきたのかも知れません。

そんな軽薄な時代相とはまったく異なって、逆行さえしているかのような、別次元の価値観の世界があることに、戦争を知らない世代の私が、改めて気づかされることになりました。それが我がレスリング部の半世紀のドラマにほかなりません。この「50年史」は、関大レスラーが目指す「ことがら」を再確認するための、チェックポイントではないでしょうか。半世紀にわたって受け継がれてきた「ことがら」が何であって、今後我々が、「青春のパライストラ」の門を叩くであろう若者たちに、何を伝えたらいいのか、その「ことがら」をあますことなく伝授してくれる「知恵の書」が本書であると確信しています。

お金で計れるモノを追求してきた日本は、現時点で、行き詰まっています。部員不足の我が関大レスリング部も行き詰まっているように見えますが、この実情は、この輝く「50年史」という極意の伝授書を得て、いかようにも克服できるものと信じています。先日、3年生の一人とマンツーマンでの練習を終えた直後に、汗みどろで、声も出せないほどに喘いでいる我々を見て、「先輩、なんでそんなにまでして、しんどいのに笑っている

んですか」と怪訝そうに尋ねられました。私のパートナーの3年生の学生が答えました。「最後のワンポイントが獲れたから……」と、あとは喘ぎながら笑みを見せるだけでした。こうして流した汗は本物（真実のことがら）です。

編集作業にあたってさまざまな「真実のことがら」を垣間見ることができました。そしてその真実をどうしても後世に伝えなければならないと思いました。本物の汗を流す喜びを、我が部員たちは、知ってくれています。この「本物」は、やはり、関大レスリングの半世紀の遺伝子の賜物だと実感しています。現在のところ少ない部員たちですが実に頼もしいかぎりです。（平成3年卒）

6. 世界に誇るべき文化：伴 義孝

まずお詫びを述べておきたい。私が関西大学に体育教員として勤務して30年ほどが経つ。その間、あの未曾有の「27回目の西日本リーグ優勝」を飾ってから今日まで、我がレスリング部は低迷しつづけている。「お前が、大学に居ながら」との声のあることも承知している。次に最大級の感謝を表しておきたい。それは、この「50年史」の発刊を決意してくれた我がOB会の裁量に対してである。現在の我が部の低迷を撥ね除けることはそんなに単純なことではない。その理由は、本書に詳しい。そうした事情のもと、「関大レスリングここにあり！」を世間に問う努力の手立てだけは怠ってはならない、と行動しつづけてきたつもりである。その思いの一環として、「50年史」を企画するのならば、日本一の代物を作るべきだとOB会で提言したことがある。だがその反応は、資金集めの問題も絡んでのことと思うが、さまざまであった。しかし結果的に「日本一」が完成したと言える。OB会の決断の賜物である。

さてこの「OB会」組織について述べておきたい。宣伝めくが私の著書に次のように書いてある。

日本の大学スポーツは、世界に類例のない、

独自の文化である。確かに、アメリカの大学スポーツは、その規模と充実度において世界的に傑出している。だが、日本の大学スポーツには、日本の風土的条件を反映して、社会的な見地からみると世界に誇りうる要因がある。それこそは、個別大学に必ず存在する、現役学生支援勢力であるところの、善意の、OB（G）組織である。スポーツ文化は、本質的に、人間が集まるところにしか開花しない。日本の大学スポーツは、実践する学生のみが集まるのではなく、その先輩たちとも、人間関係の輪を広げるという特異性を持っている。この特異性こそは日本の一つの財産とも言うべきだろう。個人主義を文化の根幹におく欧米では、この日本に見られる「現役⇔OB（G）」の繋がりは存在しない。ましてや、国威発揚のために、国策としてスポーツを利用してきた諸国には、決して、見ることのできない現象といえる。（伴義孝著『スポーツの人大島鎌吉』関西大学出版部）

この「青年」を支援する「OB（G）組織」こそは、大学当局のみでは成しえない、善意の教育施設として、機能していることを認めなければならない。のみならず、この「現役とOB（G）との繋がり」こそは、大学と社会の繋がりの欠如を埋める作業の一端をも担っていて、世界に類例のない独自の文化となっている。この事実は、正当に、評価すべきであろう。

全国大学体育連合という組織がある。大学における正課体育と課外体育と健康管理の融合のもとに大学体育の振興を促進して、もって大学教育の在り方を改善しようとする研修団体である。現在日本の大学は改革ばかりである。そうした潮流にあって、ともすれば、予算の膨らむ「体育」は切り捨てにされかねない傾向にある。その背景には、あの破綻してしまったバブル経済発想の後遺症がまだ亡霊のように大学界にも働いていて、安易なリストラ現象が稼働するという事情も働いてい

る。文化には、低俗で改めなければならない「文化悪」もある。だが見極めないままに切り捨ててしまった「在るべき文化」「伝統文化」も、戦後の日本には、数多かった。ところで、この「青春のパライストラ」という文化は切り捨てていいものかどうか、本書の語る真実を評価してもらって、厳密な点検が必要な時ではある。だからと言って、この作業は個別の「OB会」組織においてでは、自ずと制限がある。

そこで施策が必要になろう。私は、まず、足元の関西大学で、それぞれの体育会個別クラブの「青春のパライストラ」教育施設の正当なる位置づけを、今後とも、訴えていくことにする。だが足元だけでは不十分である。全国区展開の運動が盛り上がりなければならぬ。その「全国区運動」の舵取りを、前出の、全国大学体育連合に訴えかけていくことをも我がOB会の仕事としたいという

希望を、私は、もっている。全国500有余の大学にはさまざまな体育会系クラブが存在している。そのさまざまなクラブの「OB(G)組織」が、こもごも、我が関西大学レスリング部「青春のパライストラ」とまったく同じ貢献をしている。この貢献を、どう評価するのか。これは、意味のある、社会的一大教育事業にはかならない。この自覚が、いま、問われているのではないか。そしてそれぞれが、これまでどおりに善意の繋がりを維持しつつ、時代状況に則した改善をそこに加えて行けば、いまの日本の閉塞状況を打破できる大きな「原動力」ともなりうるだろう。

ここに「本書」を一人でも多くの大学スポーツ支援者の皆様に読んでいただきたい理由がある。そして、同意を得たいものと思う。賛同してくれるであろうか。(昭和38年卒)

(完)

写真▷1998年5月24日春季リーグ戦・大阪府立体育館。関大は第2部7位でした。これが関大レスリング部の現状です。少数の部員ですが「OB」との連携はバッチリです。

